九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フッサールに於ける意識の地平の問題

根井，康雄

https://doi.org/10.15017/2328793

出版情報：哲學年報. 19, pp.109-123, 1956-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

フッサールに於ける意識の地平の問題

根井康雄

ハイデッガーは「存在と時間」の中でフッサールに言及しながら「現象學の本質的なものは哲學的方向として現實的であるという點にあるのではない。現實性よりも高次のものとして可能性がある。現象學を理解することは一にこれを可能性として把えることにある」[一]という。現象的思考になじんでいない者にとつては、この言葉は一見奇異の印象を與えるかも知れない。しかしフッサールが「純粋可能性の學問はおのづから現實性の學問に先立ち、後者を一般に學問として初めて可能にする」[二]というとき、そこには『論理研究』以後のフッサールの學的探究の主導的モチーフの一つである反實證主義の立場が鮮明に示されている。實證主義にあつては、確證することは現實的に檢證することであり、可能的なものについては、現實的なものの單に空虛な延長であると考えるか、或いは學問的には全然問題としてとり上げないかのどちらかである。現象學的探究を實證的研究から分つものは、それを探究方法の構造から見るならば、可能性を本來的な意味で問題にするかしないかにある。「もし（內部經驗の實證的心理學に於て）心の形相的地平が問題になるならば、途は開かれてその實證性は克服され、絶對的現象學に移り行くであらう。」[三]こゝで形相的地平 eidetische Horizont といわれているものは、心の究極

的な可能性の全體を指している。可能性の全體が現象學的に開かるべきものとして考えられるとき、それは地平と呼ばれるのであるが、こゝでは地平の概念が現象學的探究の階程にとつてどのような必然性をもつか、又それによつて如何なる問題が解決されようとしているか等について若干の考察をしたい。

一

まづ注意しなければならないのは、現象學的探究はある順序をもつた段階を辿つて行われ、その個々の段階は現象學の全體的意圖に對してそれぞれの意味をもつと同時に、逆に全體的體系の視野の下にのみその意味が明確に汲みとられるということである。かゝる事情は現象學にとつて偶然の事情ではなく必然的なものであることは改めていう迄もないが、地平の概念についてもこれを指摘出來る。といふよりも地平はかゝる事情の具體的表現なのである。故に地平の概念について批判的考察を下そ

うとするならば、現象學的探究の如何なる段階での地平を考えているかを示すことが出來なければならない。最終的批判は現象學の全展開の後に決定されなければならないが、それと共に大切なことは學問的反省の途上で要求されるその概念の最初の出現の機會を注視することである。たとえ明確な規定に缺けるとはいえ、それが立てられ考えられなければならない最初の事情は、ある意味では後に展開さるべき規定の全部を豫示している。

彼の後期の體系的思想が比較的詳細に記述されてをり又地平の概念についても明確な位置が與えられていると思われる『デカルト的省察』によれば、地平の志向は現象學的反省が始まる最初の一歩のなかに、といふよりもそれが動き出そうとする準備的な考察のなかに既に含まれている。（尤も『イデーン』に於ては自然的立場でも考えられていて、地平という言葉を庭 Hof, 背景 Hintergrund と同じように用いているが、現象學の階程性からいうならば、反省する者自身が自然的立場に立

つ限りそこで考えられた世界は未だ本來の地平ではなく超越論的に反省された地平の概念によつて始めて解明され得る前現象學的概念といわなければならない。）

デカルトが三世紀前に掲げた普遍學への要求、つまりあらゆる先入見 Vourteil から自由になり自己自身からひき出した最後の明證にもとづいて絶對的に自ら責任を負う哲學という理念は、同じく現象學者にとつても絶えず指導的な理念である。この徹底的（ラディカル）な出發は學に志す者にとつての必然的な課題であるが、こゝで求められている完全な明證は日常的な經驗又は實證科學的認識の中で得られる明證ではなく、差當つて手許には學問的反省意識の要求にこたえるものは何もないといわなければならない。今こゝにないだけでなく、先入見を少しも混えずに考えるならば、普遍的絶對的眞理がいつか事實的に實現出來るという保證、もしくは一度得られた眞理が再び何らかの事情で變樣されるかも知れないという危惧を拒むことの出來る保證もない。それにも拘らず、學問は絶對的な眞理という理念を追求し、「近似法的にそれに向つて努力しながら無限の地平の中で生きて行くのである。」（四）現實的にはない、又事實的な可能性に關しても不定である offen という狀況が、絶對的眞理が無限の地平の中で追求されねばならぬと語るのを餘儀なくさせる。尤もこゝでは、學の實現が無限に不定であるというだけでなく、學の理念そのものが無限の不定を藏しているといわなければならない。出發點になつた「完全に基礎づけられた學」という理念は何ら確定した內容をもつものではない。徹底的に始源を求めようとする哲學者にとつては、絶對的明證にもとづいた普遍學という理念を既成のものとして最初から妥當させることは出來ない。デカルトが持つていた幾何學的、自然科學的普遍學の理念が、不運な偏見として後の世に惡影響を及ぼしたことを考えるならば、先入見の忌むべきはその固陋性にあるとしなければならない。「我々は學問の一般的理念を暫定的假定としてとるのである。」（五）それは現象學的探究の指針となり、又探

究の進むにつれて一歩一歩具體的な規定を得てくるものである。出發點になつた理念は學的反省の出發點になり得る力はあつても、まだ內容的には不定である。それが無限に不定でありながら學的な試みの指針になり得るということは、學問の理念自身が地平でなければならないことを示す。地平とはこのようにそれを開示することがそれ自身の營みであるようなあるものである。しかし出發には Thévenaz の指摘するような困難がある。(六) 徹底的反省が自身の出發點を摸索する限り、出發點に於て足踏みを繰返し學的には永久に出發することは出來ないであらうし、又もし出發點を摸索するということが既に出發していることであれば、この既成の眞理を受入れる他はなく、徹底的出發の問題は意味のないものにならざるを得ない。こうして徹底的反省の企圖はその出發點に於て拔き難いアポリヤにぶつかる。しかし問題は、出發の矛盾を指摘するだけに終るか、又これに對して更に問いを投げかけるかどうかにかゝつている。矛盾を指摘するだけでは單に形式論理の立場にしか立たず、無限に問いを投げかけて行くところに超越論的な立場が開かれる。この場合、超越論的に問題を眺めるならば、矛盾を指摘する形式論理學者の立場そのものに既に含まれている「學の理念」をとり出してみせることも出來るし、又形式論理的には矛盾を生じるような問題の困難さをそのまゝ含めて、新しい次元に於て問題を展開することも出來るであらう。故に最初の出發の困難は決して消失するのではなく、又出發が單に最初にだけあつて殘餘の反省は出發の時にひかれた軌道の上を惰性的に進むのでもない。超越論的問題の提出はいわゞ常に出發であり、出發の含む困難を常に身に引受けようとすることである。出發はその困難さの故にむしろ出發と呼ばれなければならない。地平の概念が困難を含むのも、現象學の中に含まれる常時的出發の困難をそのまゝ反映するものに過ぎない。地平は自己還歸性 Zurückbezüglichkeit をもつものとして、出發に於ける循環を止揚された形で集約的に吸收す

る。こうして地平の概念は現象學の豫備的考察に於て既に表明的になつていなければならないが、このことは徹底性を求める現象學にとつて避けられない運命ということが出來よう。

二

以上の學の理念の考察で表われる地平の概念は形式的なものに止まり、問題の具體的な深みは最初の現象學的環元によつて明らかになる。環元によつて自然的世界の全體が括弧にくゝられるのは、世界がその中で支えられる感性的經驗の明證が學問の要求する原本的明證になり得ないからであるが、こゝで自然的存在に先行する意識の純粋な流れの明證と雖も、自然的世界が經驗される感性的認識の明證が不十全的なのに對しては十全的(アデカート)な明證であるといえ、未だ眞に必當然的(アポディクティッシュ)であるとはいえないのである。『イデーン』に於ては內在的領域での明證は「意識されることがすなわち存在である」ことの故に、その不可疑性を更に批判することはなかつたが、超越論的な問いのたて方が徹底されるに及んで、意識流の十全的明證もまだ學の要求する眞に原本的な明證にはならないと考えられるようになる。例えば意識體驗には過去が不可分のものとして屬しているが、かゝる過去に對しては完全な明證を期待することは出來ない。あらゆる意識の作用が把持 Retention 前把持 Protention の時間的背景の上に營まれ、したがつてすべての內在的對象は內的時間意識の中でのみ構成される。內在的對象の統一性、超越性に注目するとき、構成されたものに對して根源的にこれを構成する作用現象が橫わり、個別的な體驗されたものに對してそれを個別的に體驗するための地平が擴がるのを見る。かゝる地平は暗黑の過去を含むだけでなく、自我の先驗的諸能力や、慣習的な固有の特性も開かるべきものとしてこれに含まれている。地平は事實的に限局された地平ではなく、可能的經驗によつて開かるべきものとして無限に不定な地平なのである。したがつて個別

的明證はそれだけで完結したものではなく、各々の個別的經驗の現象學的展開と確證を重ねて行くことによつて得らるべき一層高次の明證として、普遍的意識聯關に齎らさるべきものであり、その作業は個別的なものにとじ込められてはいない。明證は普遍的な全體の意識生命に關係づけられた志向性のあり方なのである。こゝでも注目すべきことは、自我の地平の想定が、自然的世界を「意識されたもの」cogitatum として括弧にくゝる視向轉換だけから由來するのではなく、この轉換に同時に伴われる拔本的な批判意識、すなわち意識作用 cogitationes 乃至は意識內容 cogitatum の十全的明證をさえ必然的（アポディクティッシュ）な明證としては認めないという徹底性にもとづいていることである。先きに見た「學の理念」の準備的考察の場合と同じく、地平は超越論的設問に對する解答に當然含まれる固有の現象である。

地平の具體的には意識の時間性とみられるのであるが、體驗流の地平としてこゝで考えられる時間性とは如何なるものであらうか。既に『內的時間意識の現象學講義』に於てフッサールは時間構成の問題に觸れ、根源的時間を純粹主觀性そのものとするのであつて、地平としての時間は、ふつう意識がそう解されるような《時間の中にあるものとしての意識》という超越的關係に於ける時間でもなく、意識內容がもつ內在的時間形式、つまり《意識された時間》でもない。これらの時間はまだ根源的な時間ではなく、このような時間が對象的に構成されるためには、それ自身は何物によつても構成されない獨自の對象性をもつた意識流が考えられなければならず、構成する意識流には一切の時間的賓辭をつけることは許されず、對象的に構成された時間に對して絕對的主觀性であり、純粹な作用そのものなのである。それには一切の時間的賓辭が拒まれるのであるから、通常の意味では時間的と呼ばれることは出來ず、擬時間的としか呼べないあるものである。時間は意識にとつて何かある意識されたものであるという偶然的關係に立つのではなく、た

とえ擬時間的であるとはいえそれは意識にとつての必然的形式でなければならない。構成されたものから構成するものへの遡源の試みである還元は、その遡源をそれ以上進めることが不可能になる迄反覆するところにあるとすれば、《時間の意識》ではなく《意識の時間性》が根源的に考えられなければならないことは、時間が還元の試みに最後迄抵抗するということにもとづいている。還元の試みは時間性を實は自らの中に見出さねばならないことが分かるのである。

このように根源的に考えられた意識の時間性は『イデーン』では「並んで立つている把持 Retention ではなく、連續的志向的に相覆つて關係する把持—つまり把持の把持という連續的相互漫透」[七]という形で、時間に收斂する意識流の全體性として示されている。又『デカルト的省察』でも「あらゆる考え得べき個々の體驗は、いつも統一的に前提されている全體意識の中でのみ際立つに過ぎない。普遍的意識內容は不定的に無限な統一性と全體性との下に於ける普遍的生命そのものである」[八]といつている。知覺、想起、想像その他を含めて一切の意識作用は對象定立的であるが、對象が意識された對象として對象的同一性をもち得るのは、普遍的生命として意識流が常に全體として出現することに由る。こうして意識の根源的時間性、すなわち意識の地平は、意識の普遍性 Universität 全體性 Gesamtheit の別名に他ならない。フッサールが意識を流れ Strom 生命 Leben と呼ぶところにも、意識が對象の統一に照應する主觀的統一、又は主觀的極であるだけでなく、個別的なものに於て自己顯現する主觀の全體的統一であることに留意しているのがわかる。現象學的考察とは「統一を流れに於てとり上げる」[九]ことであるが、この流れを閉じられた (beschlossen) 統一とみるのは『時間論』の立場であり、後には開かれた (offen) 統一とみられるようになる。

では自我の地平として時間性には又自我の超越論的諸能力も含まれるとは如何なる意味をもつのであろうか。

超越論的諸能力とは超越的なものの構成を荷う超越論的主觀性の內部での規則性に他ならない。超越論的主觀性の全體が流動であることが明らかになつた以上、流動の中には規則性が含まれていることも自ら明らかなわけであるが、こゝで「含まれている」とは、地平としての時間の中に孤立的に、又は超越的に含まれていることではない。地平としての時間は又そのまゝ規則性の根源でもある。さきの「學の理念」の考察に於て地平とは豫想される明證の全體であるとされたが、豫想される規則性の全體としての地平はこゝでは時間性の全體としての地平と相覆うことになる。たとえ地平が明瞭性に對してその裏の暗黑性として性格づけられるにしても、それは可能性としての混亂、乃至は規定不可能性を意味するのではない。意識現象の領域が「ヘラクレイトス的流動」であつても、その流れには嚴密な概念によつて把握可能な形相的構造類型性 Strukturtypik が支配していると考えられなければならないのである。

意識の地平はこうして遍通的な規則性を示すことが豫想されるが、しかしこの豫想は如何にして保證されるのであらうか。時間性としての地平が可能的なものであり、又その中に豫想される超越論的規則性も可能的なものに過ぎないとすれば、十分な權利を以て時間性が規則性の根源であると主張出來ない筈ではないだらうか。しかしこの疑問は、規則性がもともと本質的に（いわば純粹に可能的に）時間性そのものであることが分かれば、たゞちに氷解するであろう。何故なら規則性が本來的に時間性であれば、地平としての時間性から規則性を生む超越論的能力は容易に理解されるからである。論理的なものが超時間的であるとする通常の立場を逆轉して、論理的作業の本來持つ時間的意味をとり出すことによつて、フッサールは新しい學の可能性を巧みに見つけようとするのである。すべての眞なる對象が時間的意味に於てのみあり得ることはたゞちに認められるが、それ以上に對象の存在に關する明證自身が時間的意味をもつ。「あら

ゆる明證は永續的所有 bleilende Habe われわれに作り出してくれる。最初の明證の回復 Restitution としての新たな明證の連鎖によつて、それ自身洞見された現實に私は幾度でも戻ることが出來る。[十] こうして完全な明證とは、現象學的に分析されると「私は幾度でも出來る」という時間的性格をもつ志向的作業であり、それ故根源的時間性はこのような理想的作業そのものの作る地平と相覆うことになる。現象學では、時間的に有限な知識から如何にして超時間的な知識が獲得されるかという方向に認識論の問題があるのではなく、眞理性も時間性の內部で考えられなければならないのである。

意識が現象學的探究の第一の根源になり得るのは、以上解されたように、單に意識が自然的世界に比してより明證的に把えられるという理由によるだけでなく、意識が探究の地平になり得るからである。意識は根源的に時間性として考えられ、又規則性も本來時間性の可能的全體でしかないのであるから、あらゆる規則的なものは意識に於て構成され、又意識に於て開明可能であるといわなければならない。意識存在が自然的存在に先行するとは、超越論的設問に於て、あらゆる世界の意味がそこで開明可能であるような根據存在であることを意味する。フッサールがデカルトと同じようにコギトへの還元の道を辿るにも拘らず、デカルトの「我在り」の明證が自我を世界內の一實體として定立する限り還元は不徹底であると非難するのは、地平性をもたない自我存在は眞の意味での探究の根據になることが出來ないと考えるからである。

三

さきに地平の概念は徹底的な學の出發に於ける困難を常に擴大しながら內に含むと述べたが、還元と同時に意識の時間性として明らかにされる地平の概念にも、相對的に知られるものの中に既に絕對的なあるものを先取しようとする同じような困難、或いは個別的體驗に於て全

體的なものを志向するという困難が含まれている。又地平としての意識流の時間性は如何にして把握されるかという問題では「內部時間意識そのものの現出の仕方が志向的體驗であつて、それは再び必ず時間性として與えられなければならないのであるから、我々はこのように無限後退に禍されているように見えるところの意識の根本的特性に遭遇する。この事實を理解し開明するのは特別の困難を生む。しかしそれがどうであろうとこれは事實であり、必當然的に明證的でさえあり、自我の不思議な對自存在 Für-sich-Sein の一側面、つまりこゝでは志向的自己還歸存在という形での意識生命の存在の一側面を差當つて示すものである」。(十一)『時間論』に於てはこの問題は意識流動の微細な本質的部分である把持志向そのものの中に既に自己志向、自己反省が含まれていることから說明されたが、勿論この說明は十分ではなく、過去意識の集約的顯現は把持志向の特性で理解されても、無限に開かれた可能性の地平は、過去にのみ眼を向ける把持志向の覆い得る領域ではない。眞の現象學的反省批判は充實、確證、抹殺、錯誤等の統一的綜合でなければならない。かかる志向的作業を可能にするものが地平なのであるから、地平の循環を單に論理的に指摘することは問題の方向を謬るものである。對象的統一が成立し得るのは、現實的に見られた側面とともに可能的側面が同時に志向されているからであつて、普通の論理的表現を借りるならば、地平は現實的經驗のいわゞ前提である。しかし前提といつても論理的演繹の前提ではなく、現實性の中に含蓄された可能性 implizierte Potentialität である。したがつて地平の開明とは見えないものを見えるようにする可能的知覺のの現在化によつて匿名(アノニム)的な意識の生命の中に迫つて行くことに他ならない。

こうした自己還歸的構造は地平の概念だけでなく、地平によつて可能になる現象學のすべての概念について指摘出來る。フッサールが「志向性の地平構造は現象學的分析や記述に對して全く新しい種類の方法論の行わるべ

きことを命ずる。」[十二]というとき、彼は現象學で用いられる概念が、すべて固定的な概念で規定されることが出來ず、又現實的に充實され得る概念ではなく無限に充實可能なイデーであることをいおうとするのである。現象學で用いられている概念は、すべてそのような地平性をもつものとして理解しなければならない。フッサールは、「現象學が現象學的認識に對して無限に繰返し得る反省的批判」には不合理を見出すことは出來ず、自己から出發してあらゆる學問の根本的意味を規定する概念について「このように根源的に形成されたかゝる種類の概念にとつては、逆説の問題は全くあり得ない。」[十三]という。このような最後的批判に至るためには、考察の更に進んだ段階で、本質直觀と地平の問題、相互主觀的に構成された客觀世界の地平の問題、更には歴史の考察等と多くの問題をとり上げなければならないが、差當りこゝではそれらの問題には觸れず、最初の還元に於てとり出される意識の地平性に再び眼を向けようと思う。

四

自然的世界に先行し、それを根據づける根源的なものとして超越論的自我の意識生命がとり出される場合、超越論的自我の統一性と、從つてその存在性が規定されていると見ることが出來る。意識流は始終全體として現われることによつて、個別的對象の超越、又は個別的對象をつゝむ世界の超越を支えるものとなり得る。地平は開かれた統一として法的聯關の全體的統一である。そうしてフッサールにとつては統一性の規定は又同時にその存在性の規定でもあるから、自我の地平とは單に無限の彼方の可能的明證を指すだけではなく、何らかの意味で現實的存在性に關聯したものでなければならない。自我が地平をもつとは意識の明證が超越的世界の經驗の明證に比してより高いだけでなく、自我が、その中でのみ超越的世界が支えられる根源的存在であることを示す。フッサールがデカルトに對して非難するのは、「我在り」を

完全な明證と見ることに對してであると共に、これに關聯して自我を世界内の一實體と解する點に對してである。自我を一實體として見ることを許さないとは、實體概念で《存在》を考えようとする思想に對して、新しい存在概念を提出する用意を見せることに他ならない。歴史的な既成の《存在》思想に對して批判を加える以上は、彼が《存在》思想の少くとも或る可能的な理念を持っていなければならない筈である。

これに對してフッサール自身は、還元及び自我の地平性の發見と同時には、自我の存在性が明確な形で自覺されるのではないと反論するであらう。インガルデンによれば、構成する純粋主觀性と構成された世界との實在上の區別がなされ得るのは超越論的考察のかなり後の結果でなければならないという。(十四) 超越的な世界と超越論的自我とを存在性に於て區別するためには《存在》の反省が行われなければならないが、還元の際には世界の存在妥當を括弧にくゝること、それにも拘らず自我存在は不可疑的であること、更にノエマとしての世界もノエシス的な意識生命も開放的に無限な地平を含むことが見出されるだけであつて《存在》の反省はまだなされていないのである。反省が遂行される前にその結果を先取することは偏見を容れる恐れなしとしない。

しかし還元の操作は《存在性》に全然然關係なのではない。還元によつて、超越論的と呼ばれる新しい經驗の領域が劃定されるだけでなく、その領域が新しい、しかも根源的な領域であるとされるためには、意識の存在性が世界の解明を荷うに足るものであることが豫想されなければならない。フッサールはこの豫想の更に根源をたづねることは取敢ず避け、むしろこの豫想から出發する。彼は意識生命の存在について「先行的存在地盤 früher Seinsboden」「我々に開かれた領域 Felde」というような後の現象學的展開に對する方法的意義を強く打出すような用語を用いる。又時には意識生命を現象の全體 Universum der Phänomene として、意識と世界とは

現象學にとつて共に《現象》である點では同じでありながら普遍性 Universität に於て異なつていると解されるが如き説明もする。これらの用語は存在性にかゝわるものとして規定の上で外少の振幅をもつものではあるが、それでも世界と意識の存在論的區別がフッサールの超越論的立場の前提をなしていることが分るのである。たゞその存在論的區別が cogitatum-cogito という意識の全體的關係の中に內含されているいくつかの關係で豫示的に示されている。卽ち自然的—根源的、超越的—超越論的、構成されたもの—構成するもの、時間の中のもの—時間意識そのもの等の諸關係は、還元と同時に志向的關係の中で考えられているのである。しかしこれらの關係が、まづ自我に於てすべての問題の解明を圖らうとする設問方法を正當づけようとする單に方法論的關係に留るものとすれば、存在性の區別を豫想する眞の理由にはなるまい。いづれにしろ意識の存在論的思想の前提があつてはじめて超越論的探究の地盤が開かれことは疑いないのであり、もし還元と同時に自我の存在性が決定されていないとすれば、自我が世界の存在基盤になり得ることもなく、デカルトに對して判然と劃定される筈の立場もぼやけてくる。何故なら「我あり」の「あり」はその不可疑性だけが主張さるべきで、排去された世界と「あり」という點で本質的な區別をもつとはいえないからである。フィンクの指摘するように、フッサールでは志向的生命の存在論的規定が問題になつていないと共に、デカルトの實體概念を排斥する主張の裏には、同時に一つの存在論的見解が混入していると見なさなければならない。先走つた解釋を避けようとする細心な警戒にも拘らず、超越論的という設問の方向が成立するためには、どうしても存在思想の先取が必要なのである。

フッサールの犯したこういう過誤は理由のないものではなく、意識關係そのものの存在論的狀況にもとづいているといわなければならない。還元によつて見出される意識の關係を更に反省的にみるとき、cogitatum 及び

cogito に含まれた存在論的意味が問題になる。例えば、現象學的探求の最初の最も必要な操作が、《存在妥當の排去》という判斷中止でなければならないということ、又現象學的な志向分析が可能になるのも、世界が cogitatum として「存在の現象」Seinsphänomen と考えられる一方、意識生命は「存在の現象」になることは出來ず、判斷中止に抵折する《存在そのもの》であることに據るということ、更には cogitatum は cogito に對して超越と考えられるが、超越を「意識に非實的に（unreell）含まれる」こととするフッサールの規定は、「意識に實的（reell）に含まれる」という規定が瞬昧である以上、十分な規定とはいえず、正確には超越は世界の存在の無化が意識存在の無化を意味しないという規定で理解されなければならない、等々の事實を省みるとき、意識の志向的分析は同時に存在論的考察を內含しなければならないことに氣づくであらう。そうして眞理性を Ich kann immer wieder という可能的時間性と置きかえることによつて世界に對する自我の根源的な優位を理解しようとする試みも、その自我が意識存在でなければならない以上、存在論的にしか時間論は展開出來ないのである。フッサールが表明的に《存在》を問題としてとり上げていないにも拘らず、しかも未反省的な存在思想を混入せざるを得なかつたのも、一面ではこのような存在問題の必然性にもとづいているのであらう。

意識の存在が不可疑的であるとは、同時に《存在》が何であるかということの自明性を示す。《ある》と定立する作用を働かさないことは、世界をあるとする作用を働かさないだけで、《ある》とすることそのことの疑いではない。《ある》ということの自明性は判斷中止も及ぶことは出來ず、むしろその前提である。又意識の存在が一應明證的に考えられるということも、《存在》が何であるかの前領解にもとづいている。しかし既に知つているという事情はこれ以上問う必要がないということを意味しない。なにかゞ《存在》し、《存在》を志向する

ことなくしては現象學の探究自身が成立せず、しかも《存在》の反省がまだ十分に充實されていないことは、《存在》が時間性と同じく、又は時間性より以前に現象學的探究の地平をなすことを示しているのではないだらうか。

そうして一つの豫想を立てることが許されるなら、現象學的探究の無限の不定性が破られるのは《存在》の反省に於てであらうと思れる。現象學的探究が「無限のプログラム」であるから現象學は《事實的には不可能である》という主張に終るのではないかという危惧は、《存在》の完結性で拭われるのではないだらうか。《存在》は完結している。何故なら《ないとすることが出來ない》ことは《ある》ことであるから。このことは還元に於て意識の《不可疑性》から意識の《存在》が見出された際の前提にもなつている。故にデカルトのとつた實體としての自我の定立も、めまいのするような循環を破り得るという點では、現象學に教えるなにものかを持つている。勿論その際《存在》が學の意圖する徹底的反省、及び自我の時間性、可能性とどのように關係するかということは改めて問題にしなければならない。

註 (1) Heidegger; Sein und Zeit. S. 36. (2) Husserliana I. S. 106. (3) ibid. S. 107. (4) ibid. S. 53. (5) ibid. S. 49. (6) Problèmes actues de la Phénomenologie S. 12. (7) Husserliana III. S. 199. (8) Husserliana I. S. 81. (9) Husserliana V. S. 129. (10) Husserliana I. S. 95. (11) ibid. S. 81. (12) ibid. S. 86. (13) ibid. S. 180. (14) ibid. S. 210. (15) Problèmes actuels de la Phénomenologie S. 78.